
ある双子兄弟の異常な日常 第一部

葉月香

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ある双子兄弟の異常な日常 第一部

【Nコード】

N2706A

【作者名】

葉月香

【あらすじ】

クリスターとレイフは一卵性双生児。もともと1つだったのが別々の人間として生まれてきた。正反対なのにどこかつながっている、互いに依存しあっている少年達がほんの少し大人に近づいた、ひと夏の経験。

SCENE 1 (前書き)

ボーイズラブっぽい話です。
ご注意ください。

SCENE 1

真夜中に、汗びっしょりで、ベッドの中で目覚める。

周囲はしんと静まり返って、感じられる音といえば、自分の胸の中でどきどき鳴っている心臓の音だけ。

子供部屋に上がった時は一階のリビングでテレビを見ていた両親も、何時の間にか寝室に引きこもって休んだらしい。

起きている人の気配は、自分以外、他にはない。

緊張に強張った体をほぐそうと大きく胸を上下させて深呼吸をし、両手で顔を覆った。

(ああ、やっぱり、夢に見ちゃったよお…)

寝る前に、あんな気持ちの悪いホラー映画を見たからだ。タイトルなんか知らない、ちよつと昔に話題になった、悪魔にとりつかれた子供の話。何が恐いかって、化け物みたいになった女の子の顔で、そんなに恐いなら見なければいいのに、隣で全然平気な顔をしている双子の兄弟の手前、ついやせ我慢をして最後までしっかり見てしまった。

恐いものや気持ち悪いものは、忘れたいと思えば思うほどいつも夢に見てしまう。案の定、今夜も、あの映画の女の子に家の中を端から端まで追いかけてまわされる、ぞつとするような悪夢にうなされてしまった。

顔を横に向けて向こう側の壁にかけられた時計を見ると、闇の中につつすらとうかびあがる針は、やっと深夜の2時を回ったところをさしている。

どうしよう、夜が明けるまでまだこんなに時間がある。

心細く不安な思いでいっぱいになって、自分が横たわる二段ベッドの下から上のベッドの底をじつと見つめた。

一瞬、そこで眠っている者を呼びたい衝動にかられ、口を開きかけて、やめた。

もう10才にもなるというのに、恐い夢を見たくらいで兄弟を呼ぶなんて、男らしくないぞ。

口をぎゅっと引き結び、目を大きく見開いて、自分に向かったのしかかってくるような闇を睨みつけた。目を閉じると、またあの嫌な夢が戻ってきそうで、できなかつた。唇が震えた。

やっぱり恐かった。1人ではいたくない。
すると、上のベッドで身じろぎをする気配がした。

声に出さない彼の呼びかけが届いたかのように、二段ベッドの上で眠っていた片割れは目を覚まして、ベッドから上体を乗り出すようにして、低い声で問いかけたのだ。

「ねえ、レイフ、今呼んだ？」

レイフは、すぐには答えなかつた。口許まで引き上げた布団の端をぎゅっと握り締めて、その陰で溜めていた息を吐いた。

「…おにいちゃん……」

我ながら赤面したくなるくらい、心細げな声をしていた。

レイフが起きていることを確認すると、答えも待たずに、彼はするすると上のベッドから下りてきて、床に降り立った。

「夢、見たの？」

あくびを噛み殺し、眠たい目をこすりながら、彼はベッドの中の弟を覗き込む。

「だから、見るなって言ったのに。苦手なくせに……」

レイフは何か言い返そうとしたが、兄の手が布団を捲り上げるのに口をつぐんで、彼が入って来やすいよう、体を奥にずらした。

「馬鹿だね」

レイフは唇をとがらせた。

「だってさ…クリスターがあんな平気そうな顔をしてるのに…オレだけ恐いなんてさあ……」

「ふうん、じゃあ、僕のせいなんだ？」

「それは…違うけど……」

しどろもどろになる弟に、クリスターは喉の奥で笑った。間近に

ある、その顔を、レイフはじっと見つめた。

もともとレイフは夜目がきくので、明かりを消した部屋の暗がりの中でも、窓からうつすらとさしこんでくる外の道路沿いにある街灯の弱々しい光だけで、充分に相手の顔は分かった。

もう1人のレイフが、そこにいる。

12分だけ年上の双子の兄の笑顔を眺めていると、不安と緊張に固くなっていた体が次第にほぐれていくのが分かった。

「僕の顔に何かついてる？」と、クリスターが不思議そうに聞く。笑顔が」

レイフは、答えた。

「じゃあ、おまえも笑えよ」

そう悪戯っぽい声で囁いて、クリスターはレイフの脇腹に手を這わせ、くすぐった。たまらず、レイフは身をよじって、甲高い笑い声をたてた。

「やめるよつ、くすぐりたいよ！」

足をじたばたさせて布団の中で逃げようともがく弟を押さえつけ、クリスターは尚も脇腹を攻撃しつつ、言った。

「しつ、あんまり大きな声は出さないで。父さんや母さんを起こしちゃうよ」

「うっ……ぐぐう……だから、やめろって……」

両手で口を押さえて必死で笑い声を押さえているレイフの上ののしかかったまま、クリスターは、やはり声を殺して笑った。そうして、笑いの発作に小刻みに震えている弟の体に腕を回して、ぎゅつと抱きしめた。

「双子でよかったね。本当の一人ぼっちになることなんて、ないんだもの」

「うん」

すっかり気持ちや和らいで、嬉しそうにそう答えるレイフから体を少しずらすと、クリスターは彼のパジャマのボタンを一つずつ外して、脱がしてやった。それから、自分もパジャマを脱いでしまう

間に耐えて過ごしているのだろうか、クリスターはいつも不思議に思う。

規則正しい弟の寝息と肌に触れるその温もり、少しくすぐったい髪感触に微笑みながら、クリスターは体を傾けて、その頭に、すべすべした頬に唇を押し当てた。

ここは、とても安心できる。

(いつまでも、ずっとこうしていたい) と思いながら、静かに寝息をたてている弟の隣で、クリスターもまた幸せな夢の世界に飛び立っていく。

クリスターとレイフ、兄弟二人きりの、この子供部屋。

ベッドの中のこの温かい暗がりの中で寄り添いあい、肌を合わせ、お互いの体に回しあった腕の中に存在する、それは、閉じられた、彼らだけのちっぽけな樂園だった。

SCENE 2

僕達にとって、それはごく当たり前のことだった。

生まれてから、いや、生まれる前から、ずっとそうしていた。この先もずっと変わることはない、失うことなどありえないと、疑うこともなく無邪気に信じていた。

この頃の僕達は子供過ぎて、自分達以外の所に広がる世界のことでもそこにいる他の人間達のことでも、全く考えてはいなかった。

自分達自身も、その2人きりのエデンにいつまでも留まっていられない、変わっていくのだということにも気づいていなかった。

それとも、気づきたくないだけだったのだろうか。

別に何も、多くを望んでいたわけじゃない。そう、僕達が守りたかったもの、ずっと守り通そうとしたものは、罪のない子供時代の、今はもうなくしてしまったあの部屋、そこにあったささやかな幸せ、それだけだった。

「やだっ、やだったら、絶対に嫌だ!」

ついに癇癪を起こして涙目で叫ぶレイフに、彼らの父親ラーズは一瞬鼻白んだ顔になった。それから、どうしてこんな極端な反応を息子がするのか分らずに当惑しつつ、再び口を開いた。

「どうして、そんなに嫌がるんだい? おまえくらいの年の子は自分だけの部屋を欲しがるものだ。それに、おまえたち2人はとても成長が早くて、あの子供部屋じゃそろそろ狭くて不自由だろうと思っつて、提案してみただけなんだよ。そんな怒ったよう顔で言うこと

じゃないだろう?」

2人が小学校の過程を終えて中学校に進む前の夏休みの最初の日曜の朝、オルソン家の食卓は、父親が何気なく持ち出した提案によって、突然不穏なものとなった。

「秋からはおまえたちも上の学校に進むんだし、丁度いい機会だと思っただ」

辛抱強く尚も話を続ける父親を、レイフはまるで敵を見るような目つきで、テーブルを挟んだ向かい側の席から睨みつけている。

その手が掴みしめたスプーンで皿の中のチョコレートシリアルをいらだたしげにかきまわすのを、隣に坐ったクリスターはいつこぼすんじゃないかとはらはらしながら見守っていた。

「自分達だけの部屋なんか欲しくない。このままでいいっ!」

強情に訴えるレイフの横顔に、クリスターは目を向けた。怒りに紅潮した頬が涙に濡れているのに、クリスターは、手を伸ばして拭ってやるか抱き寄せて唇を押し当てて慰めてやりたかったが、この状況でそんなことをすれば父親がどれだけ戸惑うか分かっていたので、やらなかった。

「このままでって…それじゃあ、一体いつまでそうしているつもりなんだ? いくら双子の兄弟だからって、何もかもずっと一緒にはできないのだぞ。おまえ達はもう11才になる。そろそろ分かってもいい頃だ。それぞれが別々の部屋を持ち、違う友達や、違う興味の対象を見つけて、そうやって少しずつ独立した一人前の大人になっていくんだ」

だが、ラーズの言葉はレイフに混乱しかもたらさなかったようだ。レイフは、父親がまるで理解できない国の言葉を話しているかのような奇妙な顔をして、不安げに瞳を揺らすばかりだった。

ラーズは、途方にくれた面持ちで、一瞬迷った後、こう言った。

「おまえ達は、今でも時々一緒に寝ているんだろう?」

途端に、レイフはばつが悪そうな表情をした。口に出してそうだとは言わなかったが、その顔だけで認めてしまったも同然だった。

ラーズは深い溜め息をついて、腕を組み、椅子の背に体をもたせかけた。

「ちゃんと自分のベッドで寝なさいと、母さんからきつく言われたはずだろう？ 父さんとも男同士の約束をしたな、レイフ？」

約束を破ったと責められたレイフは、顔を赤らめてうつむいた。なんだかんだと言っても父親のことが好きなので、彼を裏切ったり失望させたりすることに罪悪感を覚えたのだ。

「ごめん…でも…本当に時々なんだよ…嘘をつくつもりじゃなかったんだよ…」

クリスターはレイフがかわいそうになった。

（そんなふうに責めては駄目だ、父さん。レイフは、何が悪いのか、どうして駄目なのか、本当には理解していない。ただ頭ごなしに怒られて、こんな後ろめたい思いをさせられては、ますます混乱するばかりだよ）

弟が取り乱していく様子をこれ以上見ていられなくて、クリスターは正面を向いた。

すると、父の隣で静かにこの親子の口論を聞いていた母親のヘレナと目が合った。話しているうちに段々感情的になってくる父とは対照的に、物静かで理性的な母は、クリスターと同じで、口をはさむタイミングを見計らっているようだった。しかし、息子と視線があうと、唇を微かに動かして、声には出さずに尋ねてきた。

（あなたはどう思っているの、クリスター？）

クリスターは胸の奥で激しい感情が沸きあがりかけけるのを意識したが、弟と違って、それを素直に表に出すことはできなかった。

「なあ、クリスター、何とか言ってみてくれよ」

ふいにラーズがそう呼びかけるのに、クリスターは肩で軽く息をついた。

「おまえの口から弟にちょっと言い聞かせてやってくれ。こいつには結局誰よりもおまえの言葉が一番きくんだからな」
クリスターはためらった。

(ずるいよ、父さん、そんな役目を押し付けるなんて。僕を裏切り者にするつもり?)

クリスターはますます気が滅入ったが、パニック寸前の弟と苛立ちが怒りに変わりつつある父親の間に立てるのは自分だけだという自覚から、ついに口を開いた。

「たぶん、父さんが心配するようなことじゃないと僕は思うな」

ラーズの視線を真向から受けとめて、クリスターは何でもないのだというように笑って言った。

「確かに、そういうことはあったかもしれない。例えば、この間のテレビで見た、すごく盛り上がったベースボールの試合のことで、2人でベッドの中で話しこんだことがあったよ。初めは興奮して目が冴えてただけけれど、いつの間にかそのまま眠りこんでしまったみたいで、気がついたら朝だった。そんなふうなことなら、時々あるよ。でもね、だから、それが何?」

ラーズが気をくじかれるくらいにあっさり、こともなげに彼は言った。

「別に、今でも小さな子供みたいに一緒にないと眠れないなんてことはないんだよ。第一、あのベッドで2人で寝るなんて窮屈で、あえてそうしたいとは思わないな」

「うむ…おまえの言うとおりなら、別に父さんがこうまで心配して口やかましく言う必要はないが…」

ラーズは、彼の言葉をおとなしく聞きながら不思議そうに首を傾げている息子を相手に、何となく緊張して、背筋を伸ばし、椅子に座りなおした。

年の割に大人びたいかにも賢そうな顔をして、大人相手でも物怖じすることなく落ちついて話すクリスターは、外見だけでなくその態度も、おかしいくらい母親に似ていた。

そのせいかもしれないが、クリスターが言うことは、ラーズはそうなのかと妙に納得して受け入れてしまうようだ。

それに対して、弟のレイフはラーズにそっくりな気性をしている。

屈託がなくて無邪気な子だが、感情の起伏が激しく、自分でもコントロールすることができない。だから、ラーズにとっては、読みやすく、可愛い反面、自分と同じ欠点が目について、つい叱ってしまうことが多かった。

それでも、ラーズが息子達のどちらも愛していることに変わりはなかった。彼は、男の子が欲しかったので、一度に2人も息子を授かったことに踊りあがらんばかりに狂喜したものだ。双子は育てにくいかもしれないなどと言われても、それがどうした、こんなに可愛い子供が2人もいるなんて最高じゃないかと、全く気にしていなかった。しかし、子供達が成長してくると、時々親である自分にも理解できない部分が見えてきて、それが彼に説明しがたい不安を覚えさせるのだ。

「それから、僕達に別々の部屋を持たせてくれるって話だけれど、それも僕は別に今すぐじゃなくてもいいと思う。父さんの言うとおり、あの部屋が狭く感じられるようになってきたのは確かで、自分だけの持ちものが増えてきたりしたら、そのうちどうしても自分だけの部屋が欲しくなるだろうと思うけれど…今はこのままで充分だよ。ねえ、父さん、いくら小学校を終えたからって、昨日の今日で、僕らが全く別のものに変わってしまうわけじゃないんだよ。そんなふうには、あまり急かさないでよ」

「いや、別に無理強いをするつもりじゃなかったんだが…ただ、ちよつと提案をただけのつもりだったんだが…ううん、父さんは、ついむきになってしまったみたいだなあ」

あんまりクリスタルが落ちついてしているものだから、つい感情的になつて自分の考えを押しつけようとしていたことが恥ずかしくなつて、ラーズは頭をかいだ。

「でも、父さんの提案は、そのうちそうするんだということ覚えていてくれよ。本当に、おまえたちはあつという間に大きくなつてしまいそうだからな。この1年で、10センチくらい背が伸びたんじゃないか？」

「14歳くらいに、よく間違えられるよ」

クリスターは、父親の気持ちに静まったことにほっと安堵して、肩の力をぬいた。

「部屋を変える時は新しいベッドを買ってよ、父さん。大人向けの手足を思いきり伸ばせる大きなのをね」

これは、父親を安心させる為の駄目押しのようなものだったが、余計なことだったかもしれない。少なくとも、クリスターが話している間じつと押し黙ってその語ることに神経を集中させていたレイフにとつては、言い過ぎだった。

「がたん。いきなり大きな音をたてて椅子を引くと、レイフは、それをほとんど蹴り倒さんばかりの勢いでテーブルから逃げ出したのだ。瞬間、その手がテーブルにあたって、食べかけのシリアルの入った皿を床に落としてしまった。謝りも振りかえりもせず、ダイニングから走り去り、2階に駆け上っていくレイフに、ラーズはかっとなつて椅子から身をうかせ、怒鳴った。

「レイフ、戻ってこい！ 戻ってきて、おまえが汚したこの床を掃除するんだ。母さんの手を煩わす気が、この馬鹿：！」

返事をしないレイフに、ラーズは本気で怒つたらしい。テーブルから離れて、その後を追っていかうとした。

「待つて、ラーズ」

彼の太い腕を、ヘレナの綺麗な手がそっと押さえた。

「レイフのことは、頭が冷えるまでしばらく放っておいてあげて。あなたが今行つても、2人とも感情的になつて收拾がつかなくなるだけよ」

双子兄弟と同じ鮮やかな紅い髪と琥珀色の瞳を持つ、美しいだけでなく賢く理性的な妻に、ラーズは一目置いていた。人はいいのだが、すぐにかつとなつてしまう彼を静められるのは、いつも彼女だけだった。天から彼のもとに舞い降りてきた女神であるかのように、夢中で惚れこんでいたからだろう。

「しかし、あいつはまた、こんな馬鹿みたいな癩癩をおこして、そ

れを謝りもせずには逃げたんだぞ。ここで怒ってやらんと、あいつのためにならんだろう」

ラーズは肩を怒らせ、今にもヘレナの手を振りきって、レイフを叱り付けに行つてしまひそうだったが、結局そうはせず、彼女に引かれるまま椅子に座りなおした。その手をなだめるようにそつとさすりながら、ヘレナはテーブルに取り残された双子の片割れを見やつた。

「クリスター、レイフのことをお願いね」

心配のあまり青ざめた顔でレイフが消えて行つた方向と父の様子を見比べているクリスターに向かつて、ヘレナは落ちついた声で囁いた。

クリスターは迷わず頷くと、すぐに椅子から立ち上がって、弟の後を追つた。

（全く、レイフは、一体どうしたっていうんだ？ 俺は何も理不尽なことを言つたわけでも、無理に押しつけようとしたわけでもないんだぞ。あいつらが段々大きくなってくるのを見て、そのことを自覚しろ、年にふさわしい行動を取れと促しただけじゃないか。今すぐでなくてもいいとさえ言つてやつたのに……大体、別々の部屋を与えられることのどがそんなに嫌なんだ？ 別に、それで兄弟が引き裂かれてしまつわけでもないだろうに……いや、あいつの反応は、まさにそんな感じだったな。なあ、双子っていうのは、ああまでお互いに対して執着するものなのか？）

2階の子供部屋を目指して階段を上つていく途中、ダイニングで話し合う父母の声が聞こえたので、クリスターはつい足を止めた。彼の聴覚は並外れてよく、ごく低い囁き声でも何を話しているのか聞きとることができた。

（もう少し待つてあげて、ラーズ。あの子達もいつかは分かるようになるわ。お互いから離れる準備がまだできていないだけなのよ）
クリスターは階下を見下ろして、眉を僅かにひそめ、それから、再び階段を上り出した。耳がよすぎるというのも考えものだ。聞き

たくないことまで聞こえてしまう。

（大人というのは、勝手なものだな）と、クリスターは思った。

彼ら兄弟がすごく小さかった頃は、むしろ2人がぴったりとくっついていることを喜んだものなのに。いつもおそろいの服を着せられ玩具も同じものを1つずつ与えられた。親だけでなく外で会った他の大人達も、そっくりな双子達が元気いっぱい転げまわるように遊んでいる様子に目を細め、「1人でも可愛いけれど2人揃うと一層可愛い」なんてことを言っ、よくお菓子をくれたものだ。ヘレナに連れられてよく行った公園では、芝生の上で遊んでいると、気がつけば学校帰りの女の子達に遠巻きにされ、もの欲しげなうっとりした注視にさらされた。近所ではちょっと有名な小さなアイドルのようなものだった。だから、2人が一緒にいることは、他の人達も幸せにするいいことなのだとその時は思っていたのだけれど、どうやら事情は変わりつつあるらしい。

「レイフ、入るよ？」

クリスターは、一応そう断ってから、自分のものでもある部屋の扉を開いた。

「レイフ？」

返事はない。クリスターはレイフのベッドの方に近づいていった。膨らんだ布団の下から、ごく低いすすり泣きがもれてくる。

クリスターは棚の上からティッシュペーパーの箱を取ると、それを無言でレイフが隠れている布団の中に押しこんだ。しばらくして、ごそごそとまさぐる気配がし、激しく鼻をかむ音がした。

「そんなふうに強くかむと、また鼻血が出るよ」

クリスターはベッドの端に腰を下ろし、布団の上から弟の体をなだめるように軽く叩いている。しばらくするとレイフも少し落ちついたのだろう、掛布からそつと顔を出して、クリスターに向かって囁きかけた。

「クリスター……」

クリスターはにっこりした。

「うん」

レイフの顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃだったので、クリスターはティッシュの箱を掛布の下から探し出すと綺麗に拭いてやった。

「おまえは、本当に世話が焼けるねえ」

レイフはベッドの上で身を起こし、クリスターの顔を間近でじつと覗き込んだ。

「どうして」と、彼は幾分恨めしそうに言った。

「あんなこと、言ったんだよ。別々の部屋なんていらぬのに。このままでいいのに。裏切る気かよ、兄ちゃん」

クリスターは困ったように首を傾げた。

「だって…ああ言わないと、父さんは納得しないだろう?」

「でも、じゃあ、父さんに言われるままオレと離れてもいいんだ、クリスターは」

「離れるなんて大げさだよ。僕らは同じ家に暮らしているんだよ」

「でも、嫌なんだ、このがいいんだよ」

レイフが引つ張るので、クリスターは自分も弟のベッドの中に入っていた。レースに見つかったらまた怒られるかもしれないが、仕方がなかった。

「僕だって、ここが好きだよ」

レイフの温もりで一杯の布団と一緒に包まれて、クリスターは相手の体に腕を軽く巻きつけて囁いた。

「なくしたくないよ」

昔は、もつとたくさんの、2人だけの秘密めいた遊びがあった。

ごく幼かった頃、彼らには自分達だけに通じる、省略を多用する単語と手振りによる会話があった。それを禁じたのはレースだ。

どうして駄目なのかと兄弟が尋ねると、彼は困ったような顔でこう言った。

「他の人達にも分かるようなちゃんとした言葉で会話しないと駄目だ。自分達だけに分かればいいってものじゃないんだぞ。そんなことを他の人達の前でしたら、皆、おまえたちが他の星からやってき

たエイリアンであるかのような不安な気持ちになって、おまえ達から離れていってしまうだろう」

不安になったのは本当はラーズ自身なのだろうが、確かに彼の言うことは正しい。そっくり同じ姿をした人間2人がそこにいて、周囲のことなど眼中になく、お互いだけに熱中している。眺めている第三者にとっては、疎外感と嫉妬、不安な苛立ちを覚えさせられる光景だろう。

他にも、お互いを鏡に映る像に見たて向かい合って同じ動作を試みる遊びとか、ベッドの中で裸になって一緒に眠ることも、今ではもうやめた「してはならない」ことだった。

クリスターには大人達がそれらの遊びを禁じる理由が理解できたが、レイフには納得できない。彼の意識はまだ2人が一括りに扱われていた幼年時代から脱け出しておらず、引き離されることに強い抵抗を覚えている。

彼にとって、クリスターはもう1人の自分だった。一緒にいることが当たり前なのに、それを否定されることは、まるで自分の存在そのものが悪いのだと言われているも同然だった。

「心配することはないよ、レイフ。父さんも僕達が嫌がるなら無理は言わないから。よかつたじゃないか、この部屋でこれまでどおり一緒にいられるんだよ」

「でも、いつかは離れなきゃならないんだろ？」

「まだ先の話だよ、考える必要はないよ。1年か、ひよつとしたら、2、3年くらいこのままでいられるかもしれない。その頃には僕達の考えも変わって、離れることにそれほど抵抗を覚えなくなっているかもしれない」

「そんなこと、本気で信じて言ってる訳じゃないだろ？」

レイフの鋭い追求に、クリスターは口籠もった。彼自身、全く信じてなどいなかった。

彼らの母ヘレナは聡明な人で、双子兄弟のことも、いつだってラーズよりずっと理解していた。兄弟が1人前の人間として別々に生

しつづけることは、やはりできないのだろうか。

「ねえ、レイフ」

自分の中で強い欲求がせりあがってくるのを感じて、クリスターはそれを忘れるためにも、唐突に調子を変えて、全く違う話を弟に対して持ち出した。

「考えても仕方がない、気持ちが塞ぐだけのことより、目の前のことも楽しいことを考えようよ。ほら、もうすぐだよ。アッシュフィールド湖で2週間のキャンプだよ。おまえだって楽しみにしてるいんだろ？　ね、後で父さんの所に行って、今年はカヌーやボートのこぎ方を教えてって頼もうよ。去年まではまだ小さいから無理だ、危ないって触らせてくれなかったけれど、今年は大丈夫だと思わない？」

レイフは、キャンプと聞いて途端に目を輝かせた。気持ちがころころ変わるのは、レイフの長所であり欠点だ。

アッシュフィールド湖のキャンプ場は、オルソン家が夏休みによく利用する場所だった。美しい湖畔のロッジを借りて過ごす2週間ほどの家族の休日を、毎年双子達は心待ちにしていた。

「カヌーかあ、オレ、やりたかったんだ。今年は父さんもいって言うってくれるよね」

「それから、山歩きや釣りもたくさんやるよ…お日様が昇ってから沈むまで1日中遊び回ろう。僕達はきつと日に焼けて真っ黒になるよ」

さつきまで泣いていたのが嘘のように明るい笑顔になって来週の週末からの家族一緒の休暇の計画に浸っている弟の様子に、クリスターの気持ちも和らいだ。

レイフの笑った顔は好きだ。少しの陰りも卑屈なところも歪みもない、まっすぐな彼の気性そのものの屈託のなさが好きだ。見ていると、何だか胸の奥ががほかほかと暖かくなる。

クリスターもついつりこまれて、さつきまでの胸を締め付ける不安や父親に対する微かな怒りも忘れ、微笑んでいた。

弟の無邪気なこの笑顔を見ることが、クリスターにとって何よりも幸せであるかのようだった。
彼らが幼かった頃、そして、その後もずっと。

SCENE 3

12分間の差。

クリスターは、オレよりも12分早くこの世に生まれた。

逆に言えば、オレは12分あいつに遅れたわけだ。

その差を意識し始めたのは、いつの頃からだったろう。たぶん、小学校に上がった辺りだと思う。

気づいたのは、親以外の大人の評価というものがオレ達の生活に入りこんできたからだ。

クリスターは早熟だとよく言われ、オレよりもずっと早く読み書きも覚えて、いつも本ばかり読んでいたけれど、それを差として考えることは、それまでなかった。けれど、学校という小さな競争社会に入ると、どうしても自分達が比べられているとことを意識しないわけにはいかなかった。

クリスターは、成績では同じ学年の子供達の中で群をぬいていた。教師の質問にはいつもすらすらと答えだし、逆に鋭い質問をして彼等を戸惑わせることもあった。

実際、クリスターにとって、それらのクラスは物足りなかったのではないだろうか。3年になる頃には、クリスターにはデルタプログラム（天才児特別教育プログラム）を受けさせた方がいいのではないかと学校から勧められた。近隣の幾つかの学区の子供達の中から僅か20人だけが受けられる特別クラスなのだが、迷った挙げ句、クリスターは辞退した。オレと離れて、別の学区にある学校に通うのが嫌だったからだ。

一方、オレは別に成績は悪くなどなかったが、それでも、兄と比べると明らかに劣っていた。

時々、「双子なら、同じ能力を持っているはずなのにねえ」というようなつかぬ教師の言葉に傷つき、かつては意識したこともな

い、その差に焦り、どうにかして埋めようとあがいた。

何もかも同じはずの相棒に見出した違いに、オレはどうしても我慢ならなかった。だが、如何せん、どんなに努力しても、追いつくことのできるものではなかった。

同じ遺伝子を持つてはいても、発現するかしないかで、個性という名の違いは出てくるものらしい。唯一の慰めは、身体能力では2人の差はほとんどなく、ひよっとしたらオレの方が少し上かもしれないことだった。

オレは同じ年の誰よりも速く走ったし、高く跳ぶこともでき、反応も速かった。昔NFLの選手として短い期間ながら活躍した父親の影響で始めたフットボールでも誰よりも優れていたし、中学校のチームから誘われることもしばしばあった。

だが、オレは別に、それによってさえもクリスタールを追い越したいわけではなかった。

ただ、あいつと同じでいたかっただけなのだ。そう考える時点で、オレは、初めからあいつに負けていたのかもしれない。

「お母さん、お母さん、クリスタールが風邪をひいたみたいなんだ、声が変わんだ」

明日からキャンプ旅行に出かけるという日の夕方、キッチンで夕食の準備をしていたヘレナの所に、不安げな面持ちのレイフがクリスタールを引っ張ってやってきた。

「風邪をひいたの、クリスタール？」

大げさに、まあ、大丈夫なの、早く病院に行かなきゃというような感情的な反応をすることは、この母に限ってなかった。彼女は洗った手をタオルで拭いた後、キッチンの隅っこで弟に伴われてじっ

と黙りこくっているクリスターのもとにやってきた。

「口を開けて、喉の奥を見せてちょうだい」

素直に従うクリスターの喉を調べ、喉もとのリンパ腺の辺りも触れてみながら、ヘレナは首を傾げた。

「別に喉に炎症はないし、リンパ腺も腫れていないし…」

白い手を息子の額に乗せて、彼女はクリスターの顔を覗き込んだ。「熱もない。別に風邪という訳ではなさそうだけれど」

クリスターは一瞬ためらった後、口を開いた

「風邪じゃないと思うよ…たぶん…」

しかし、そう囁くクリスターの声の異常にヘレナも気がついたようだ。

確かに、ここ数日クリスターは声が出にくそうにしていた。

「本当に大丈夫なの？ 明日からキャンプなんかに行ってても平気？ 悪くなったりしない？」

自分のことのように兄の体を案じているレイフに、ヘレナは顔を向けて、穏かな声で促すように言った。

「平気よ。おにいちゃんは病気じゃないと思うわ。試しに、ちょっとテストをしてみましようね。クリスターをくすぐって、笑わせてみて」

くすぐって、笑わせる？

レイフは目をぱちくりさせたが、こういう悪戯は好きだった。

ひるんだ顔でじりつと後じさる兄を見ると、とたんにその気になっ
て飛びかかり、むしゃぶりついて脇腹の弱い部分をくすぐってやっ
た。

「や、やめるよっ、レイフ…ひゃっ…はははっ…!!」

たまらず笑い出したクリスターの喉から迸った声は、しかし、レイフの高く澄んだものとは異なっ
て、不安定ながら大人の男の声のようだった。

「やっぱり変だよ、その声！」

レイフはくすぐる手を止めて、顔色を変え、そう叫んだ。

「病院に行かないと」

懇願するような目を上げるレイフの頭を撫でながら、ヘレナは微笑んだ。

「心配しないで、レイフ。クリスターは声が変わりが始まったのよ。学校でも習ったことがあるでしょう？ あなた達くらいの年から、男の子は皆、大人の声に変わっていくのよ」

「こえがわり……」

レイフは目を大きく見開き、呆然となって、呟いた。彼の注視を向けられて、クリスターは何やら気恥ずかしげに顔を背けた。

「大人の声……」

そう囁いた自分の声、相変わらず甲高くて弱々しい子供の声に驚いたように、レイフは口をつぐんだ。喉をそっと押さえた。

12分の差。

「でも、オレは、まだ……だよ……」

レイフは、クリスターが自分より先に変声期を迎えたことに激しく動揺していた。

「あなたも、もうすぐだと思っわ、レイフ。それ程差はないはずよ」
慰めるような母の声も、レイフの沈んでしまった気持ちを引き上げることはできなかった。

クリスターに置いて行かれてしまうと、レイフはいつも不安だったのだ。

クリスターにもレイフの不安が分かるのだろう、後ろめたそうな顔をして喉を押さえている。

突然、レイフはかっとなった。

「変な声！ オレ、その声、大っ嫌いだ！」

そう叫ぶなり、ヘレナが止める間もなく、レイフはキッチンを飛び出し、家の外に駆け出していた。

なぜか裏切られたような気がして、しばらくクリスターの顔など

見たくないレイフは思った。

(にいちちゃんの馬鹿！ また自分1人だけ先に行っちゃうなんて、ひどいよ。 少くらい待っててくれたって、いいのに)

無茶な要求だとは分かっていたが、それはレイフの正直な気持ちだった。

そのまま近くの公園に行って、ベンチに坐り、レイフはしばらくの間1人でしくしく泣いていた。しかし、散歩やジョギングにやってくる人々の注視を向けられ、そのうちの何人かにどうしたの坊やと声をかけられて、さすがに恥ずかしくなった彼は家に引き返した。

(絶対、口なんかきいてやるものか)

夕食の時も、その後子供部屋で2人きりになっても、レイフは強情に口を開かなかつたが、彼の我慢がもつたのはそれまでで、一晩寝て目が覚めると、いつものように真つ先に上のベッドによじ登って、クリスターに向かつて「おはようっ」と叫んでしまった。

そうすると、別にもういいやという気持ちになった。

クリスターを無視することなど不可能だし、そうすることで寂しくて仕方がなくなるのは、結局レイフなのだ。

またしても先を越されてしまったというこだわりはあるけれど、きつとすぐに追いつくから。

そう思って、レイフは自分を慰めることにした

SCENE 4

「まあ、そっくり！ 驚いたわ、双子なのね！」

アリス・ゴールドバーグが叫ぶようにそう言った瞬間、その口から覗いた銀色の歯列矯正器具に、ついクリスターの目はいつてしまった。

あんなものをつけていて、気持ち悪くないのだろうか。

家族揃って出かけたアッシュフィールド湖で、兄弟は彼女と出会った。

オルソン家が借りたロッジの隣に、彼女の家族はやはり休暇で滞在していたのだ。そうして、ヘレナがアリスの母と親しくなったことから家族ぐるみの付き合いが始まった。

オルソン家のバーベキューデイナーに招待されて、両親と共にやってきたアリスは17歳。長いストレートの金髪とくすんだ緑色の瞳のなかなかの美人だった。

紹介されたオルソン家の双子を見て目を丸くした彼女は一目で彼らを気に入ったようで、湖を臨むことができるロッジの前庭でのデイナーの間中、クリスターとレイフに向かってしきりと話しかけてきた。

レイフは、この年の異性と話す機会は今まであまりなかったせいか、緊張のあまり、ついぶつきらぼうになっちゃったようだ。別に彼女のことを嫌いなわけではない。むしろ健康的に日に焼けた伸びやかな手足とか、ぴったりとしたティーシャツの胸のふくらみさまぶしくて、気になって仕方がなくせに、6歳も年上の相手に何をどう言ってもいいかも分からず、怒ったような顔つきで視線を逸らして黙り込んでいた。

レイフの反応から、自分は嫌われていると取ったのか、それとも単に話にならないつまらない子供だと結論したのか、やがてアリスはクリスターだけを相手にすることにしたようだ。

次第に夜も更け、父親達は適当にアルコールも回つていい気分になり、母親達はやはりお喋りに熱中し出した頃、表に持ち出していたラジオからいいムードの音楽が流れてきた。

「ねえ、クリスター、踊りましようよ」とアリスが言って、椅子から立ち上がった。

「ダンスなんてできないよ、僕」

大抵の物事には動じないクリスターが怯んだように囁くのも聞かず、なかなか強引な彼女は彼の手を引っ張って、立ち上がらせた。

親の目を盗んでほんの少し飲んだビールのせいで、幾分大胆で解放的な気持ちになっていたのかもしれない。

クリスターは、最初は困った顔をしていたが、彼女の勢いに負けて結局ダンスのパートナーをすることになった。

クリスターがちらつと弟の方を見ると、レイフはぽかんとした顔で兄が連れ去られていくのを見送っていた。

レイフを放つておいて自分だけが女の子と仲良くするなど、クリスターは何となく気まずい気分がした。

「アリスの足を踏みつけるんじゃないぞ、クリスター！」

ほろ酔い気分のラーズは息子に向かってからかうように叫んだ。

クリスターが年上の女の子の積極的な態度に戸惑いつつも、一所懸命に相手をつとめている姿にヘレナも微笑みを誘われたようだ。

しかし、ふとレイフの方に視線を移し、彼が一人ぼっちで、苦痛に満ちたくるおしげな目をして、少し前にはやったバラードにあわせて踊っている2人を追っているのにふと眉をひそめた。

「あなたのお母さんって、すごい美人よね、クリスター。昔ミス・アメリカに出たことがあるんですって？ あなたのお父さんが自慢していたわよ」

アリスにリードされて、初めてにしてはなかなか上手にダンスの相手を務めながら、クリスターはぴったりと彼女が身を寄せてくるのに少し困っていたのだが、表情には出さずに穏やかに答えた。

「うん、ミス・マサチューセッツ洲として準決勝までいったんだけ

れどね。そこでちょっとトラブルがあつて、辞退したんだ」

「あら、それも何だかカッコイイわ。自ら辞退したなんて」

「母さんはそういう経歴はあまり誇らしくないそうなんだけれど。」

ミスコンに出た女性なんてグラマーなだけの馬鹿女だろうと男どもに思われがちで嫌なんだよ。それに、基本的に、あれは女性蔑視の考えに基づいているものだからって、どちらかと言えば母さんは反対なんだ。時々ね、テレビのコマーシャルなんかで、無意味な女の人のヌードが出てくると、『馬鹿な女！』って不機嫌そうに呟くんだ。本当に馬鹿なのは、その女の人じゃなくて、そういう広告を作った製作者やそれを喜んで見ている男の人達なんだということは承知しているけれど。たぶん母さんはフェミニスト寄りなんだと思うよ。でも、テレビのトークショーに出ている人達みたいに、ミスコンは性を商品化するもの、男女平等の理念に反するものだから何が何でも絶対やめさせるべきだなんて、凝り固まっているわけじゃないんだよ」

「アリスがいきなり足をとめたので、クリスタは危うくぶつかりそうになった。」

「ど、どうしたの、アリス？」

アリスは顔をぐいっと近づけ、戸惑って瞬きをする彼の琥珀色の瞳につくづくと見入った。

「あなたって、子供のくせに妙にインテリぶった生意気な話し方するのね、クリスタ。それも面白いけれど、あんまり過ぎると女の子を退屈させるわよ」

「う、ごめん」

別に謝る必要はなかったのかもしれないが、どんなに大人びて見えようがクリスタも所詮は小学校を終えたばかりの子供だったの
で、アリスの奔放な物言いや態度には振りまわされてしまうようだ。

一方のアリスはクリスタのことは自分より年下だとは知っていたが、さすがにまだ11才だとは夢にも思っていなかったはずだ。
大体、フェミニズムについて論ずる11才など、そう簡単にいてた

まるものではない。

アリスにたしなめられて、恥ずかしそうに頬を赤くして、どうしたらいいか分からないというように黙りこんだまま瞳を揺らしているクリスターに、アリスは表情を和らげて微笑んだ。

「あなたはお母さんにそっくりね、クリスター」

アリスは声を低めて、囁いた。

「こんな綺麗な男の子、私、見たことがないわ」

「ア、アリス…」

自分を見つめるアリスの潤んだ目にクリスターはどぎまぎした。

こんな状況ではどういう態度を取れば一番いいのか本から得た知識で対処できるものではなく、さすがに経験不足の彼には分からなかった。できれば、適当な言い訳をして彼女から離れレイフのいる場所に戻りたかったのだが、その言い訳の仕方が分からずに、クリスターは身を固くして立ち尽くしていた。

アリスの瞳に悪戯っぽい光が瞬いた。

アリスは、クリスターの肩越しに彼らのことなどおかまいなしに自分達の話に熱中している大人達を見やったかと思うと、ちよっと身を屈めるようにして彼の唇に軽くキスをした。

クリスターの体が小さく震えた。

「私、喉が乾いちゃった。ヘレナおばさん、コーラをもらってもいいですか？」

何事もなかったかのようにテーブルに戻っていく彼女のすらりとした後ろ姿を凍りついたように立ちつくしたまま、クリスターは呆然と見送った。

思考停止状態。

少しして頬に上ってきた血を意識しながら、クリスターは己の唇を手の甲で軽く押さえた。

女の子にキスされてしまった。もちろん、こんなことは初めて。

刺すような視線を感じてそちらを見ると、案の定、泣きそうな顔をしているレイフと目があった。

妬いているのだ。だが、どちらに？

クリスターがばつの悪い気分で見返しているうちに、レイフはぶいっと顔を背けてしまった。

後であれやこれやと言つてなだめてやらなくてはならない。全く、アリスのおかげで、楽しいキャンプが台無しになりそうだ。

だが、困ったと思う反面、彼女との出会いに、これまで覚えたことのない不思議と胸を躍らせる興奮をクリスターは見出してもいた。毎年同じように繰り返し返される、家族だけの休暇に、今年はまた別の楽しみが加わったようだ。

アリスは年上だし、奔放で、どう接したらいいか分からない部分もあるけれど、だからこそクリスターは興味をかきたてられる。あんなふうに突然にキスされても嫌な感じはなかった。むしろ他人に意表を突かれたことを喜んでいた。

唯一の不安はレイフのことで、アリスはどうやらクリスターだけに関心を抱いており、また、レイフもアリスに反発を、少なくとも今の時点では覚えているということだった。

クリスターはできれば3人で仲良くしたいのだが、この分だとそれは難しいかもしれない。

テーブルに戻ったアリスは、コーラのグラスを手へレナと談笑しているが、隣に坐っているレイフには見向きもしない。レイフも怒ったように頬を膨らませて、彼女とは反対の方向に視線を向けてしまっている。

クリスターは、その様子に内心溜め息をつきながら、アリスに触られた唇に指先をそっと持っていた。

そして、まだ心臓がどきどきしているのを意識しながら、アリスがあんなふうなキスをレイフにもしてくれたいのと思った。

SCENE 5

あんな女、大嫌いだと、レイフは思っていた。

何の関係もない他人のくせに、当然のように彼らのもとにやってきて、我が物顔にクリスターの隣の場所を占拠し、レイフなどそこに存在しないかのように振る舞う。

アリスは、レイフのことを余計な邪魔者だと考えているのだ。本当はクリスターと2人だけになりたいのに、レイフがいるからそれができない。

全く、気のきかない子ね、どこかに行ってくれないかしら。そんな刺すような視線を向けられる度に、レイフは居たたまれなくなつた。だが、そこは本来自分の占めるべき場所なのだという思いと、こんな女に負けてたまるかという意地で、逃げ出しはしなかった。

大人達の前ではそれなりに礼儀正しくしているアリスだけれど、実のところ、性格はかなり悪い。少なくともレイフに対しては、そうだった。

性格ブス。

一体どうしてクリスターがアリスを気にいったのか、レイフには理解できなかった。実際、同じ年の友達と遊ぶ時よりもアリスと話している時の方がクリスターは楽しそうだ。

子供じみたところのほとんどない、頭がよすぎる理屈家の彼には、年の離れたアリスの方が一緒に時間を過ごして満足できる相手なのかもしれない。

それにしなつて、アリスの正体を知れば、クリスターには優しくてもレイフには意地悪ばかりすることを知れば、たちまち嫌いになつてもよさそうなものだ。

もしかして、本当にクリスターは気がついていないのだろうか。いつもはレイフよりもずっと察しがいいクリスターなのに、騙されている？ 信じたくないけれど、おそらく、そうなのだ。

クリスターを騙すことができるなんて、恐るべし、アリス・ゴールドバーグ。

レイフは、本当に、アリスのことが苦手だった。

「あら、クリスター、ボートをこぐの上手じゃない。とても初めてだとは思えないわよ！」

アリスのはしゃいだ笑い声を聞きながら、レイフはボートの隅っこに膝を抱えてうずくまり、一人ぼっちで、惨めさを噛み締めていた。

目を上げると、慎重にオールを使ってボートをこいでいる兄のすぐ傍に脚を触れあわすようにして坐っているアリスの姿が見えてしまうので、レイフは自分の膝が頭上から降り注ぐ7月の強い日差しを反射してキラキラと光る水面をひたすら睨みつけているしかなかった。

この日、クリスターとレイフがボート遊びをするという話をどこで聞きつけてきたものか、アリスは湖畔の貸しボート屋にいた兄弟のもとにやってくる、いつも通りの強気な口調で言ったのだ。

「私も一緒に乗りたいわ。ねえ、いいでしょう、クリスター？」

この言葉にレイフは激しく抵抗した。

「このボートに3人も乗ったら、窮屈だよ！」

せっかくの兄弟2人きりのボート遊びをアリスに邪魔されてはたまらないとレイフは決死の思いで抗議したつもりだが、アリスには全くこたえていなかった。

「あら、そうなの？ 嫌なら、あなたが残ったら？」

アリスにつんじた調子で返されて、レイフは開いた口が塞がらなくなかった。

あなた、一体、何様のおつもり？

そうとも、何故レイフが置き去りになどされなければならぬのだ。後から割りこんできたこの女こそ、放置されてしかるべきではないか。納得できない、できるはずがない。

「こんな勝手な我が俤女の相手をする事なんてないよ、クリスタ。行こう！」

癪癪を起す寸前になりながら、レイフはクリスタに向かってずがるような気持ちで叫んだ。

頼むから、こんな奴の言うことなんか聞かないでくれ。楽しい計画でいっぱいだったはずのキャンプなのに、アリスが現れてからクリスタと2人で過ごす時間は滅茶苦茶にされっぱなしなのだ。だから、このポートだけは絶対に譲れない。クリスタと一緒にいる所にこんな余計な闖入者など欲しくない！

クリスタにレイフの思いが伝わらないはずはない。分かってくれるはずだ。いつだって、そうなのだから！

なのに、一体どうしたことだろう。この時のクリスタは、ちょっと困ったような顔でレイフを見、それからその後ろで腕を組んで挑戦的な表情をうかべているアリスを眺め、肩で軽く息をついた後、こう言ったのだ。

「レイフの言うとおり、ちょっと窮屈な思いをさせてしまうかもしれないよ。それに、僕はポートを漕ぐのも初めだから、うまくできなくて、アリスをイライラさせるかもしれない。それでもいいのなら、一緒に行こう」

レイフは、一瞬目の前が真っ暗になったような気がした。

兄の言葉が信じられず、とっさに聞きなおしそうになったくらいだ。しかし、彼がそうするよりも先にアリスがはしゃいだ声を上げ、レイフを突き飛ばすようにしてクリスタに駆け寄り抱きついたので、レイフは、そんな彼らを前に馬鹿みたいに口を開けてわなわなと震えることしかできなかった。

魔女。

(クリスタの馬鹿、クリスタの馬鹿：どうしてアリスなんかの

言いなりになるんだよつ。馬鹿、馬鹿…。い、いや、違う…。クリスタは悪くない。悪いのはアリスだ。男を…ええつとなんて言うんだっけ、そう、『たぶらかす』…悪い女なんだ。あ…『あばずれ』って言うんだ、きつと、こういうのを…)

ポートの上でも、レイフなどまるで視界に入らないかのようにクリスタばかりに話し掛け、必死にオールを操っている彼の腕の使い方を見ては、わざわざ触って、ああしろこうしろと教えているアリスに、レイフはもう怒る気にもならず、すっかり力のぬけてしまった体をポートの縁にもたれさせて、何度も深い溜め息をついていた。

寂しい。

その時だ。アリスがふいにレイフの方を振りかえり、声をかけてきたのは。

「レイフ、どうしたの？ さっきからずっと黙りこくって、妙に元気がないじゃないの？」

おまえのせいだ、おまえの。

「ね、喉が乾いたんじゃない？ ジュース、飲もうか？」

いきなりアリスがクリスタからレイフに注意を移し近づこうと立ちあがりかけるのに、彼の心臓はひっくり返りそうになった。

「い、いらぬよ。オレ、別に喉なんて乾いてない」

どうしてこんな上擦った声になるのか、レイフ自身にも分からなかった。

「レイフの方は、まだ声がわりしてないのね。可愛いボーイソプラノだわ」

そう囁いて、アリスはくすつと笑った。

レイフは真っ赤になって、両手で口許を押さえた。

「アリス、そんなふうには立ちあがったら、危ないよっ」

クリスタの制止の声が上がった、次の瞬間、ポートが激しく揺れた。

「あ、危ないっ」と叫んで、とっさにレイフは起き上がり、アリス

を支えるために腕を伸ばした。そう、彼は大嫌いなアリス・ゴールドバークを助けようとしたのだ。

その胸をアリスの手がどんと突いた。中腰の不安定な姿勢でいたレイフはバランスを崩し、揺れるボートの縁に脚をぶちあて、そのままアツシユフィールド湖の澄んだ水の中に見事に転落した。

何故？

数瞬の間、何が起こったのかレイフには分からなかった。湖に落ちてしまった、早くボートに上がらなければ。必死の思いで水面にうかび上がり、濡れて滑るボートの縁を掴むと、レイフは自力で体を半分引き上げた。

「おにいちゃん…た、助けて…」

咳き込みながら助けを求める、その顔が引きつり、歪んだ。

ボートの中では、転びかけたアリスをしつかり支えたクリスタが彼女の顔を覗き込みながら、「大丈夫？」というようなことを囁いていた。アリスはその体に馴れ馴れしくももたれかかって、ご満悦の様子だ。レイフには、そうとしか見えなかった。

(あ、あの女…！)

レイフの中で、何かが音をたてて千切れ飛んだ。

低い唸り声を発し、鬼のような形相でボートに這いあがると、レイフはアリスに向かって怒鳴った。

「アリス、おまえ、わざとオレを突き飛ばしたな！ おにいちゃんから離れるっ、この…悪女！ そ、そんなふうにべたべた触るな、クリスタはオレのもんだぞ！」

アリスは、そんなレイフを肩越しに振りかえり、白々と冷たい目をして言った。

「何、言ってるのよ。あなたが勝手に私にぶつかって、勝手に落ちただけじゃない」

「よっ…よくも、よくも、よくも…そ…んな…！」

怒りも過ぎると適切な言葉さえ出てこなくなる。

湖に浮かぶ小さなボートの上だということも忘れ果てて、レイフは

激昂のあまり身悶えし、激しく足を踏み鳴らした。

ぐらりと、またボートが揺れる。

「レイフ、やめるんだ！」

クリスターの鋭い叱責が飛んだ。

「こんな場所で暴れるんじゃない。ボートが転覆したら、どうするんだい？ とにかく今は先に岸に戻ることにするよ。話し合うのはそれからしよう」

クリスターにたしなめられて、今にもアリスに飛びかかろうと身構えていたレイフは、青ざめた。

「ど、どうして、アリスなんかの肩を持つんだよ、クリスター」

クリスターの厳しい顔をそれでも懸命に睨みつけていたのだが、やがて続けていられなくなったようにレイフは顔を背けた。

レイフの胸は情けなさで一杯だった。そのまま力がぬけてしまったようにへなへなとボートの中に坐りこみ、岸にたどり着くまで彼は一言も発しなかった。

「さあ、このタオルで体を拭きなさい。それから、すぐにロッジに帰って乾いた服に着替えるのね。いくら夏だからって、そのままですいたら風邪をひくわ」

ボートを返しに行っているクリスターが戻ってくるまで、レイフはアリスと2人きりで岸边に取り残された。

少し離れた場所にあるカフェのテラスにアイスクリームを買っている家族連れが見えるくらいで、他に人影はない。

レイフは無言でアリスからタオルを受け取った。彼女と2人でいるのはやはり嫌だったので、少し歩いて、大きな樫の樹の根もとに坐りこんだ。

「悪かったわね、さつきは。でも、本当にわざとじゃなかったのよ」
レイフを追いかけてきたアリスが、そう話しかけた。
レイフは顔を上げて、悲しそうな目で彼女を見た。

まるで傷ついた小さな子犬のようだ。さすがに良心が咎めたのか、アリスはもう1度、

「ごめんなさい」と囁いて、レイフの手からタオルを取り上げると濡れた頭や顔を優しく拭いてやった。

レイフは逆らわなかった。何だか今初めて見るかのような目つきで、間近な所にあるアリスの顔を見、つんとした鼻の辺りにうつすらとあるそばかす、気の強そうな眉とその下の伏せられた瞼を縁どる長い金色の睫毛が木漏れ日を受けてキラキラと光っている様子に、綺麗だなあと見惚れていた。

「どうしてなんだよ」と、ぼそりとレイフは呟いた。

「どうして…：クリスターにはあんなに優しいのに、オレには意地悪するんだよ？」

アリスはタオルでレイフの腕を拭いてやっている手を止め、目を上げた。何故か、レイフは心臓がどきどきと鳴り始めるのを意識した。

クリスターは、アリスのことが気に入っている。

今まで、クリスターが好きになったものは、レイフも同じように好きになった。クリスマスにもらった大きなテディ・ベア、水槽の中でキラキラ光る熱帯魚、一緒に頼み込んで飼うのを許してもらった子犬。

けれど、アリスは嫌いだ。大嫌いだ。

「だって、あなたはクリスターとは違うもの」

激しくなっていた心臓の鼓動が、一瞬、止まったかと思った。

「ち、違っつて…：どこが…：？」

激しくうつろたえながら、レイフは聞き返した。

「そうね…」

不安げに瞳を揺らせているレイフを見下ろしながら、アリスは軽

く首を傾げて、考えこんだ。

「クリスターと同じ髪」

そう囁いて、アリスはレイフの濡れた赤銅色の髪の一房をそっと引っ張った。

「同じ瞳、同じ鼻、同じ唇……」

歌うように言いながら、レイフの頬を両手で挟むようにして、アリスは顔を近づけてきた。

レイフは、緊張のあまり息ができなくなった。アリスの草色の瞳をこんなに近くで見たことなどなかったし、こんなふうにアリスがレイフの顔を長い時間じつと見つめてくれたこともなかった。クリスターに対しては優しく手をつないだり頭を撫でたりするアリスだけれど、レイフはあまり触られたこともなかった。クリスターとレイフの一体どこがそれほど違うというのだろうか。

「何もかもがびっくりするくらいに同じね……でも、違うわ」

アリスの指がレイフの頬をぎゅうつとつねって、引っ張った。

「痛いっ！ な、何するんだよっ！」

レイフは腕を振り上げて怒ったが、アリスは身軽に彼から飛びのいていた。

「あはははっ、面白い子ね。レイフ、クリスターなら易々と女の子に頬つぺたをつねられたり、そのことにびっくりしてそんな間の抜けた顔をしたりしないと思うわ」

ひくつとレイフの喉が鳴った。大きく見開いた両目からは堰を切ったように大粒の涙が溢れ出した。

「レイフ、レイフ、ここにいたのかい。ごめんよ、遅くなって……」

貸しポート屋から戻ってきたクリスターの声を聞いたが、涙でかすんだレイフの目にその姿はよく見えなかった。

「レイフ、どうしたんだ？」

クリスターがはつと息を飲むのが分かった、その瞬間、レイフは木の根元から跳ね起き、転がるように逃げ出した。

「レイフッ！」

クリスターはすぐにレイフを追って駆け出そうとした。しかし、その手首をアリスが掴んで引きとめた。

「待って、クリスター」

「アリス…レイフに、一体何をした？」

クリスターの声に険悪なものがこもったが、アリスは気づいた素振りも見せなかった。

「別に大したことじゃないわ。レイフはあなたとは違う、そう言っ
てやっただけよ。本当のことでしょう？」

クリスターはアリスの手を荒々しく振り払った。クリスターがこ
んな乱暴な態度を見せたことはそれまでなかったので、アリスはさ
すがにたじろいだ。

「違う」

クリスターは氷のように冷たい目をして、言った。

「間違っているのは、アリスの方だよ」

そう言い残して、そのまま立ち去ろうとするクリスターに、アリ
スははっと我に返ると、その前に回りこむようにして立ちふさがっ
た。

彼女も、かっとなっているようだ。

「待って、クリスター。レイフを追いかけてもいいけれど、その前
に1つ約束して欲しいの。今夜、もう1度ここに来てちょうだい」

クリスターは、当惑したように瞬きをした。

「レイフにも、もちろんおじさんやおばさんにも内緒で、こっそり
ロτζジを脱け出してきた…そうね、今夜12時くらい…」

子供はもう寝ている時間だよと一瞬言いかけたが、アリスもクリ
スター自身も、彼のことをまだ11歳なのだとは全く思っていないか
った。

「僕1人で？」

クリスターは、考えに沈みながら、聞いた。

「そうよ。レイフは、駄目…あの子はまだ本当にねんねだもの。ク
リスター、私の言ってる意味は分かる…？」

アリスはそつと声を低めて囁くと、手を伸ばし、クリスターの腕に指を滑らせた。

クリスターは頬を少し赤くして、体をずらしアリスの手から逃げた。

この年の女の子は皆、こんなふうに積極的で大胆なのだろうか。これで普通なのだろうか。こんな時男の子はどういう反応をしたらいいのだろうか。怯んでいるとは、思われたくない。

「…分かっていると思うよ、アリス」

でも、レイフが…と言いかけた、その唇をアリスのキスが黙らせた。彼女の歯列矯正器具が唇にあたって、少し痛いキスだった。

「この続きは、今夜しましようね。逃げたら、私、あなたのことを臆病者だと思うわ、クリスター。だから、きつと来てよ！」

そうやって一方的に約束を取りつけると、アリスは大きく手を振って、笑いながら、風のように駆け去っていった。

その姿を、クリスターは立ち尽くしたまま呆然と見送った。

ひりひり痛む唇に触れた後ふと指先を見下ろすと、引っかかって唇が少し傷ついたのだろう、微かに血がついていた。今度彼女とキスする時は、用心しよう。

(今夜：たぶん、もう1度することになりそうだし)

少し赤くなつて、クリスターは胸のうちで呟いた。それから、そうしたいのかしたくないのか、自分の気持ちをはかりかねて首を傾げた。

アリスとキスするのは嫌いではない。女の子とする色々なことに興味が無いとも言わない。いや、正直言って、何も知らない子供でいることはつまらない、あらゆる意味で早く大人になりたいとクリスターは思っている。

「でも、レイフが……」

今度は声に出して呟き、クリスターは、迷いに揺れ動く目で、アリスが消えていった方から弟が駆け去った方へと頭を巡らせた。

SCENE 6

12時5分前。

「あら、あなたの方が早かったのね、クリスター」

柔らかく草を踏む足音が近づいてくることにクリスターはとつくに気がついていたので、今初めて分かったというような素振り以後ろを振りかえった。

「うん…」

どこことなくはにかんで、クリスターはうなずいた。

今夜は、明るい満月がよく晴れた夜空にうかんでいる。

月明かりの下で、アリスの長い髪は白っぽく、その顔も青ざめて昼間見る澁刺とした彼女とは少し違って見えた。いつもはジーンズ姿の方が多い彼女が、淡い色の膝丈くらいのワンピースを着てきたせいかも知れない。

「おばさん達には見つからないで出てこれたの？ レイフは？」

「大丈夫、皆、ぐっすり眠りこんでいるよ。レイフは、恐い夢を見たとか、よほどのことがないと朝まで起きないし」

アリスは、笑った。その笑顔も、いつもとは違う、おぼろげなもので、クリスターはもしかしてアリスも不安なんじゃないだろうかという気がしてきた。

「本当によかったの、アリス？」

「何が？」と問い返されて、クリスターは顔を赤らめて、うつむいた。

夜でよかった。アリスの目では、クリスターが今真っ赤になっていることまで分らないはずだから。

「そんな所につつまってないで、こちらにいらっしやいよ」と言いながら、アリスは小脇に抱えて持って来た厚手のブランケットを草地の上に広げた。

「用意がいいんだね…」

半ば感心し半ば鼻白みながら、クリスターはおずおずとアリスの隣に腰をおろした。

「こついうこと…今までもたくさんした…？」

レイフみたいな言い方になっているなど、今の自分の緊張ぶりがクリスターはおかしくなった。

「女の子にする質問じゃないわよ、クリスター」

「ごめん」

素直に謝るクリスターに、アリスは軽い笑いをあげたが、すぐに真顔になった。彼女はクリスターの肩に手を置き、自分の方に振り向かせた。

「あ、待って。アリス、僕にさせて」

アリスは眉を跳ね上げ、面白そうに目を輝かせた。

案外クリスターが積極的なことは彼女を喜ばせたようだが、クリスターは、ただアリスの歯列矯正具が唇に引っかけたまま痛い思いをするのが嫌だったのだ。

そうして、クリスターはためらいがちにアリスの肩を抱き寄せて彼女の歯に引っかけられないように慎重にキスをした。しかし、彼の頭の片隅では、別のことが引っかけかかっていた。

レイフを残して来てしまった。

クリスターが唇を離すと、アリスは小さな溜め息を漏らし、それから、彼の肩を促すように引っ張った。

クリスターは再びアリスの唇に触れ、彼女の手が自分の手を取って導くままにその柔らかい胸を探り始めた。

しかし、唐突にクリスターは彼女から身を離れた。

「何よ」

不機嫌そうなアリスの声に、クリスターは顔を背けて立ちあがり、すぐ傍の大きな樫の木の下まで歩いて行った。アリスから離れると、しばし、そのまま考えこんだ。

「するの？ しないの？」

溜め息をつきながら、アリスは幾分投げやりに問いかけてくる。

もつと大人びた子だと思っていたけれど、やっぱりまだ子供なのだ、がっかりしているのだろう。

それは別に構わない。アリスにどう思われるかなど、クリスターには結局それほど重要な問題ではなかったのだ。

クリスターは、櫛の樹の下の暗がりの中、顔を上げ、不機嫌そうなアリスを遠くに眺めた。

「アリス、僕のが好き？」

クリスターの問いかけに、アリスは一瞬ひるんだようだ。

アリスには影の中に隠れているクリスターの顔は分からないだろうが、クリスターには彼女の当惑がはつきりと分かる。

アリスは不安げな手で胸を押さえた。

「え、ええ…好きよ」

らしくもなく緊張して、アリスは応えた。その声は、微かな震えを帯びていた。

どことなく居心地悪げに、アリスはクリスターの次の言葉にじつと耳を傾けている。

「僕が好きなら」

唇からごく自然に滑り出た言葉を、クリスターはぼんやりと聞いていた。

「レイフのことも好きになつてくれないと」

アリスは、はっと息を飲んだ。

「それができないのなら、僕はこのまま帰るよ」

アリスがクリスターの言っていることを理解するまで、少しの間を要した。

「何…何を言ってるのよ、あなた…本気じゃないでしょうね？ レイフを、どうして私が好きにならなきゃならないの？」

クリスターはすつと目を細め、畳み掛けるように言い募った。

「アリスがもしいいと言ってくれたら、僕はレイフをここに連れてくるよ、今すぐに」

アリスは呆然となって、急に何か得体の知れないもの変わって

しまった、彼女のお気に入り少年を凝視した。さすがのアリスもこんな展開は予想していなかったのだろう、しばし、返す言葉も見つからなかった。

クリスターが好きなら、レイフのことも好きになれ？ 全く、ありえない話だった。

「あなたって、いかれてるわっ」

腹立たしげに吐き捨てて、アリスは身を起こしかけたが、ふと気を変えたように坐り直した。

「でも、どうしてそんなことをしたいと思うの、クリスター？」

クリスターは微かにたじろいだ。

「ねえ、どうして？」

アリスから自分の姿が見えない所に隠れたまま、クリスター自身もどうしてと口の中で呟いていた。

「どうして？ どうして？」

「だって……」

震える手で、クリスターは口許をそっと押さえた。

「好きなものは何でも……僕達はずっと共有してきたから……」

その目は愕然と見開かれていた。自らの言葉にぞっとしたように激しく頭を振りかぶり、クリスターは両腕で己の体を抱きしめた。

「いいわよっ」

アリスの叩きつけるような言葉がクリスターを鞭打った。彼は文字通り震えあがった。

「レイフを呼んで来るといいわつ。ただし、あの坊やがこんなことをしたがるとは思わない。あなたと一緒に私に触りたがるなんて思えないけれど！」

その言葉に慄き、クリスターは逃げるようにその場から駆け出した。

(レイフ)

クリスターは、すやすやと眠っている弟のベッドの脇に立って、その顔を神妙な面持ちで見下ろしていた。

(レイフ、レイフ…起きてよ)

ベッドの中で、手足を投げ出すようにしてぐっすりと眠りこんでいる弟の邪気のない顔を、クリスターは祈るような眼差しで見つめながら、床に跪いた。

(レイフ、起きて、僕と一緒に起こうよ…)

規則正しい寝息をたてている弟の顔を覗き込みながら、クリスターは揺すり起こそうとして手を伸ばしかけるが、何故か躊躇い、下ろした。

(何もかもを僕達は一緒にしてきた。一緒に生まれて、同じベッドで眠って、同じ服に玩具、同じスポーツに夢中になって…ずっと同じでいた…。だから、ねえ…)

クリスターは顔を近づけ、甘えるようにじゃれつくように、弟のつやつやした頬を唇で軽くつついた。すると、レイフが寝返りを打って顔を傾け、その口がクリスターの口にあたった。

慌てて、クリスターはレイフから身を引き離れた。とっさに口許を押さえた。レイフの唇の湿っぽくて柔らかな感触が残っている。頬がかあつと熱くなった。

後ろめたいことをしたような気分になって、当惑したまま立ち尽すクリスターの視線の下で、レイフはふいに顔を歪めると、右手を顔の上に持ち上げて庇うような仕草をし、唇を震わせた。

「馬鹿：アリスなんか、大嫌いだ…嫌い…：どっかにいっちゃえ…」
昼間彼女に苛められたことがよほどこたえたのか、夢の中でまで悔し泣きをして、2、3度、ひくひくと喉を鳴らすと、レイフはまた静かになった。

レイフの規則正しい寝息だけが、静まりかえった部屋の中、聞こえる。

クリスターの方はレイフの眠りを妨げることが恐いかのようにじつと息を潜めているというのに、レイフは全く気づかず、実に無邪気で幸せそうだ。

クリスターはそんな弟の様子をしばし見守った後、再び身を屈めて、半ばはねのけられた掛布をかけなおしてやると、その頭を優しく撫でた。

レイフは夢もない深い眠りに再び沈んでいったようで、その寝顔は安らかなものになっている。温かくて、健康そのものの幼い子供の顔だった。

クリスターとそっくり同じものだけれど、違っていた。

12分の差。

クリスターは密かに溜め息をついた。いくらクリスターが望んでも、今までずっとそうしてきたのだと言っても、今レイフを連れていくことはできないのだと彼は悟ったのだ。

(ゆっくりお休み、レイフ)

彼は、寂しそうな目をして、囁いた。

「好きだよ」

アリスは、何度目かの溜め息をつきながら、1人、湖の岸边に腰を下ろして、眼下に広がる月明かりに光る水面を眺めていた。

クリスターは戻ってこないかもしれない。

「ふん、馬鹿馬鹿しいわ。あんな子供なんて、待っててやる必要もない。さっさと帰ってしまえばいいのに……」

同じことをずっと彼女はひとりごちていたのだが、実際帰ろうとしなかったのは、それ程、あの大人びた綺麗な少年が気にいって

たからだ。

しかし、さすがに年下の子供に振りまわされているこの状況に我ながら腹立たしさを覚え、やはり帰ろうとアリスが起き上がりかけた時、

「アリス」と、彼女を呼ぶ声が、すぐ後ろでした。

思わず「ひっ」と息を飲んで、アリスはうるたえつつ振りかえった。

すると、彼女の待ち人である赤毛の少年が、妙に悄然とした様子で佇んでいた。

「あ…ああ、びっくりした。クリスター、あなたって、まるで猫みたいに何の気配もさせずに近づいてくるのね…」

アリスは我知らず胸の上を押さえた。早くなった心臓の鼓動が感じられる。それから、クリスターが1人であることに気づき、眉を寄せた。

「レイフは…駄目だったのね？」

クリスターはこくりと頷いた。

「だから…無理だって、言ったのに…」

クリスターは黙りこくつたままやってくると、アリスの隣に腰を下ろした。

「レイフは、何て言ったの？」

月明かりにうかびあがるクリスターの横顔、決して彼女を見ようとはせず、己の想念に捕らわれている、誰も寄せつけない頑な表情に、アリスは少し不安になった。

すると、クリスターはゆっくりと首を横に振った。

「何も。僕は、レイフを起こさなかった」

アリスは首を傾げた。

「どうして？ あなたは、レイフと一緒に来てもらいたかったんでしょう？」

クリスターはうつむいた。

「駄目なんだ。だって、レイフは…まだあんなに子供で…早く僕に

追いついて欲しいのに…追いついてくれないんだ…」

「クリスター！」

アリスははつと息を飲み、思わず動転して叫んだ。クリスターの、じつと湖を睨みつけているその目から唐突に涙が零れ落ちたからだ。「僕はレイフと一緒に来てもらいたかった…ずっと同じでいたかったのに…」

そう震える声で呟いて、クリスターは抱え込んだ膝の上に顔を伏せた。

アリスは何と声をかけるべきか分からなくて、しばらく、クリスターの細い肩が微かに震える様に魅せられたかのように見入っていた。

やがて、アリスは優しい声音で慰めるように囁きかけた。

「馬鹿ね、クリスター。泣くことなんてないわ。ずっと一緒になんていられるはずがないじゃないの。あなたとレイフは違う人間なんだから」

「違う！」

思いの他激しい声がそう否定するのに、アリスは黙りこむしかなかった。

「違う…違うよ…」

今度は、ふいに自信がなくなったかのように、弱々しい頼りないな声が呟いた。

「クリスター…」

アリスは、ふいに、この風変わりな少年が心底愛しくなった。

本当は、もつときつい調子でたしなめてもよかった。こんな重度のブラザー・コンプレックスには、その馬鹿さ加減をうんと思いついて、間違いを正してやるべきなのだ。

例えどんなに姿形がそっくりでも、ずっと一緒にいて、何もかも同じにしてきたのだといつても、クリスターとレイフは、将来、同じ1人の女の恋人や伴侶になることはできないし、同じ子供の父親になることもできないのだという、当たり前前に早く気づいた

方がいい。そうする方が、本人達のためだろう。

しかし、アリスは実際にはそうはせず、手を伸ばして、微かに震えているクリスターの頭をいたわるように撫でてやりながら、語りかけたのだ。

「それでも、あなたはここに1人で戻ってきたのね、クリスター。レイフの為に待つてあげるんじゃないかと、1人でも先に行こうと…あなたがそう決めたんでしょう？」

クリスターの体が怯えたように大きく震えるのがアリスの手に伝わった。

2人一緒でないと恐いのだ。今まで1人で何かをしたことなどなかったから。クリスターが何を恐れているのか、アリスには分かっただよな気がした。

「大丈夫よ、クリスター。レイフは少し出遅れただけで、すぐにあなたに追いつくわ。それにね、こんなこと、別に大したことじゃないのよ…」

母親めいた優しい口調で言って、アリスはクリスターの肩に手を置き、ゆっくりと体重をかけて、その体を柔らかな草むらの上に敷いたブランケットに押し倒した。

クリスターは身を固くして、だからといってアリスをはね除けて起き上がるわけでもなく、唇を引き結び、不安げに揺れる瞳で彼女を見上げていた。

その両頬をアリスが手で挟むと、クリスターはびっくりしたように首をすくめた。

「綺麗ね」

まだ少し涙の残った、クリスターの琥珀色の瞳を覗き込んで囁くと、アリスは彼の額にキスをした。

クリスターは思わず目を閉じた。すると、その震える瞼の上に濡れた頬に、唇にと、アリスは順番にキスを与えていった。

クリスターはアリスの優しい愛撫にただ身を任せ、己の意思などどこかに置き忘れてしまったかのように、じっと横たわっていた。

(レイフ…)

その頭の中は、しかし、残してきた弟のことで一杯だった。柔らかな清潔なベッドの中で無心に眠りをむさぼっていたレイフの幼い顔、その熱のこもった肌のすべすべした感触や甘い匂い。

アリスがしてくれる気遣いに満ちたキスさえ、つい触れてしまったレイフの唇の感触を思い出させるものでしかなかった。

レイフは、クリスターを映し出す鏡のようなもの、もしかしたらあんなふうになっていたかもしれない彼自身。この期に及んで、やはりレイフがいるあの温かい暗がりにはやはり戻りたいのかもしれない。

アリスと2人きりでここにいることにクリスターは鈍い後悔の念に苛まれていた。しかし、そんな微かな迷いも、やがてアリスの指先に肌の敏感な部分を触れられ、ふっと漏らした熱い溜め息と共に消えていった。

「アリス…」

クリスターはふいに目を開けると、己の体を緩やかに撫で下ろしていた手を捕まえ、そのままアリスの体を抱きしめるようにして己の下に組み敷いた。

アリスは逆らわず、むしろ次にクリスターがどう出るのか興味津々の様子で、彼の下でされるがままになっている。

これでいいのだろうかとおぼつかかなげな手つきでクリスターがアリスのすわりとした脚を撫で押し開くと、彼女はくすぐったそうな笑い声をたてて、彼が下着を脱がすのを手伝ってくれた。

さてはこういうことがしやすいようにわざわざスカートをはいてきたのか。全く、大したものだと感心しながら、クリスターはたぶんこんな時にふさわしいだろうと思う台詞を囁いた。

「好きだよ」

そう口にした瞬間、クリスターはかあつと体が燃え上がったような気がした。

(好きだよ、レイフ)

一瞬、ここに来る前に弟に対して呟いた自分の言葉とだぶって、彼は慄いた。それから、突然衝動的な強い昂ぶりを覚え、仰向けになつて横たわつたまま誘うように微笑んでいるアリスに挑みかかっていた。生まれて初めて覚える激しい興奮だった。

「アリス…アリス…」

うわごとのように、もうあまり意味のなさなくなつた名前を、クリスターは呼びつづけた。

そうして、初めはうまくいかなかったが、アリスが協力してくれたおかげで何とかうまく己を彼女の中におさめた。それだけの刺激でもう弾け飛んでしまいそうだったが、クリスターは低い呻き声をあげて体を前後に揺すり、そして、やはり呆気ないくらいに簡単に果ててしまった。

(レイフ…)

アリスの柔らかい胸に顔を埋め、とても穏かな気分で、クリスターは肌の下で激しく打っている心臓の鼓動を聞いていた。アリスの温かさがとても慕わしく、愛しくて、このままずっと抱きしめたいと思つた。

しかし、日頃が馴染んでいるものとは違う温もりと匂いに包まれていることに、やがて違和感を覚え、顔をしかめると、クリスターはそつと彼女から体を離れた。

「クリスター？」

アリスの不思議そうな問い掛けには答えず、クリスターは彼女のすぐ隣に寝転がった。火照つた体の上を吹きぬけていく夜風が気持ちいい。

一人でこういう特別な体験をした時、どういう反応をすればいいのだろうか。2人ならもつと、ああだこうだと言ひ合ったりできてよかったのだろうか。それは、もう分からないけれど。

いずれにせよ、終わった。やり遂げた。成功した。

クリスターはひんやりとした空気を思いきり吸いこんで、吐き出した。

何しろ気が狂わんばかりに興奮していたので、少し乱暴だったかもしれないし、自分のしたいようにしすぎてしまったかもしれない。おまけに早く終わってしまったのでアリスには色々不満が残ったことだろうが、初めての性交なんて、きつとこんなものだ。

アリスから離れ、荒い息を吐きながら地面の上に横たわって、クリスターは頭上に相変わらず冴え冴えと輝く月を眺めていた。

（前と同じだ）

それで別に世界の何が変わるわけでもないし、確かに、こんなこと、別に大したことじゃないんだ。

隣にいるアリスが気だるげな声で何事か呟き体に腕を回してきたが、何となく応える気になれなくて、クリスターは黙っていた。それどころか、彼女には悪いけれど、少しわずらわしくさえ感じていた。

レイフの所に早く帰りたい。それに、いつもならばとつくに夢の中にいるはずの時間なのだ。

「ね、クリスター、今、何考えてる？」

緊張と興奮が冷めた後、急速に疲れと眠気がこみ上げてくるのを覚えながら、クリスターはあくびをうまく押さえこんで、アリスの耳にはとても優しく響くだろう声でこともなげに答えてみせた。

「アリスのことだよ」

そんなことは嘘に決まっているということは、誰よりも彼自身がよく知っていた。

SCENE 7

「っ…っ…っ…！」

明け方近く、レイフはベッドの中でしきりと寝返りを打ち、びくりと体を震わせたかと思うとふいに目を見開いた。

(あ…あれ…?)

むくりと身を起こし、自分がいる場所を確認するかのよういきよるきよると辺りを見まわした。それから、ここがキャンプに訪れている湖のほりにあるキャビンの自分達の部屋であることを思い出し、肩を大きく揺らせるように溜め息をついた。

(何か、変な夢見た…)

レイフはベッドの上に坐りこんだまま、しばらくの間、ぼんやりした。ひどく汗をかいて、暑くて、もやもやと変な気持ちが生じた。夢。よくは覚えていないけれど、アリスが出てきたような気がする。

レイフは怒ったように顔をしかめて、再び横になろうとした。

(あれっ?)

その時、レイフは奇妙な顔をして、パジャマのズボンと一緒にパンツをまくり、恐る恐る手を突っ込んで探ってみた。ぬるりと濡れていた。

レイフはばつが悪そうに唇を歪め、下着の中から手を出すと、しよんぼりと頭をうなだれた。

(おねしょ…しちゃった…?)

何となく納得できない気がして、助けを求めるように隣のベッドに視線を向けた。

クリスターは反対側に顔を向けてぐっすりと眠りこんでいる様子だ。

「おにいちゃ…」と呼びかけて、レイフは言葉を飲みこんだ。理由

はよく分からないけれど、何だか後ろめたくて、恥ずかしい。
クリスターには内緒にしよう。

それから、そのまま寝るのも気持ちが悪かったので、汚れたパンツを脱ぐと、取り敢えず丸めてベッドの下に隠しておいた。

朝になったら、お母さんにごめんなさいと謝って、洗ってもらおう。下着を脱いでしまったのでおなかとお尻がすーすーするけれど、夏だし、それで風邪をひくことはないだろう。

そうして、再び掛布を引き上げて寝転がったのだが、変に目が冴えてしまつて、レイフは寝つけなかった。

変な夢を見た。

そのことばかりが気になって、思い出そうとすれば、心臓の鼓動が激しくなった。

大嫌いなアリス・ゴールドバーグが出てきたのなら嫌な夢だったのに違いないのに、実際それほど嫌な気持ちはしないことも不思議だった。

(だって…あのアリスが、何だかさ…)

レイフはベッドの中で一人赤くなって、ぶるぶると頭を振ると、目をつむつて、無理矢理にでも寝る構えに入った。しかし、忘れようと思えば思うほど、気になってくるものなのだ。

(いつも嫌な奴だけけれど…夢の中のアリスは嫌じゃなかったよ…いつもあんなふうなら、オレはきつと…仲良くできるのに…)

そう、いつもクリスターには優しいのにレイフには意地悪ばかりする彼女が、夢の中ではとても優しくかったような気がしたのだ。

「レイフ、レイフ、どこにいるんだい？」

クリスターの呼ぶ声が聞こえても、レイフは返事をせずに、ロツ

ジの裏手に広がる林の木の根もとに隠れるように坐りこんでいた。

しかし、どんなに息を殺していても、クリスターから隠れることなどできなかつた。いつだって、レイフがどんなにうまく隠れたつもりでも、クリスターは彼の居場所を易々と探し出してしまふのだ。この時も、土を踏みしめる足音がすぐにレイフのもとに近づいてきた。

「こんな所にいたのかい、レイフ。アリスが待っているから、早くおいでよ。彼女はもう行っちゃうんだよ。だから、お別れを言わないと」

レイフは悲しそうにかぶりを振った。

「行かない」

その声は、今にも泣き出しそうな震えを帯びていた。

「アリスが帰っちゃうのが、そんなに嫌？ おまえが、そんなに彼女のことが好きだったなんて思わなかつたよ」

レイフはびつくりしたように顔を上げた。

「好きなもんかっ！ あんな奴、早くいなくなればいいって、ずっと思ってたよ！ だって…だってさ、オレのこと苛めてばかりで…クリスターをオレから取り上げて…すごく、すごく嫌な思いばかりししたんだから…」

この日の朝、突然、アリス達家族が休暇を終えて帰るのだという話を聞かされて、ショックを受けたのは、クリスターではなくレイフの方だった。しかし、アリスがいなくなることが寂しいなどと認めたくなくて、真っ赤な顔で、しどろもどろになりながら反論している。

それを聞きながら、クリスターはふと別のことに気がついたように眉を寄せた。

「ねえ、レイフ、風邪でもひいたの？ 声が変わだよ」

唐突に聞かれて、レイフは黙りこんだ。顔をしかめ、喉をそつと押さえて、ぼそりと呟いた。

「知らない。そうかもしれない。パンツを脱いで寝ちゃったから、

寒かったのかもしれない」

「えっ？」

「…何でもない」

そんな弟をクリスターはまじまじと見つめ、実際レイフが居心地悪くなるくらい、穴が開きそうなくらいに見つめ、ふっと微笑んだ。「風邪じゃないと思うよ、それ」

レイフは瞬きをした。それから、嬉しそうに笑っているクリスターの顔を凝然と見つめながら、己の喉に、確かめるように、また触れた。

12分の差。

何かある度に、その差をいつも意識してきた。どうしても超えられない、とても大きな違いであるかのように考え、焦り、不安を覚えてきた。けれど、そんなに思いつめることはなかったのかもしれない。

「母さんの言った通り、やっぱり、それ程差はなかったね」

そう、たった12分の差でしかないのだ。

「行こうよ」

クリスターはレイフに向かって手を差し出した。

「僕と一緒に行こう。今アリスにちゃんとさよならを言うっておかないと、彼女が行ってしまつてから、すぐ後悔すると思うよ」

レイフは小さく頷き、その手を取った。クリスターが引く張るのにあわせて、起き上がった。

双子兄弟は手を握り合つたまま、しばし、お互いの顔を見詰め合った。

頭上に生い茂る葉の間から漏れてくる金色がかつた光が、彼らのそっくり同じつややかな紅い髪や顔の上で踊っている。

辺りはしんと静まり返り、木々の緑に囲まれ隠されて、まるで、ここには2人だけしか存在しない、隔絶された別世界にいる、そんな

な錯覚に一瞬だけ捕らえられた。

「おおい、クリスター、レイフは見つかったのか？」

父親の呼ぶ声が聞こえた。

2人は夢から覚めたように瞬きをし、そちらを振りかえった。林の向こうに、彼らがこの夏休みに両親と一緒に泊まっているロッジが見えた。

「急ごう」

クリスターが言うのに、レイフは素直に頷き返した。隠れてこっそり泣いていたことがアリスにはわからないように眼の辺りを手の甲でこすり、じつと見守っている兄に笑いかけた。

「うん」

彼が11才の夏。

まだまだ一人前の大人とは言えなかったけれど、それでも、もう小さな子供ではない兄弟がそこにいた。

再び、彼らを呼ぶラーズの声があった。

2人は頷きあい、彼らを待ちくたびれているだろう大切な人達のもとに、手をつないだまま、一緒に走り出した。

SCENE 7 (後書き)

第一部は今回で終わりです。

次は中学生になった双子が出てきますので、よろしければお付き合
いください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2706a/>

ある双子兄弟の異常な日常 第一部

2008年11月7日07時28分発行